



広島女学院同窓会 東京支部ニュース

編集・発行 東京支部役員会

2011. 11. 20
第 57 号

今年度の聖句 平和を実現する人は幸いである。 マタイによる福音書 5章9節

広島女学院創立 125 周年を祝う会

同窓会会長 古屋由利子 (西川／大英 14)

いつも同窓会に対してご支援、ご協力を頂きますこと、心より御礼申し上げます。

2011 年、広島女学院は創立 125 周年を迎え、卒業生も 23,000 人をこえました。1886 年 10 月 1 日、広島で初めてのキリスト教主義に基づく女学校が産声をあげました。蒔かれた一粒の種、広島女学院が校母ゲーンズ先生をはじめ多くの方々のたゆまぬ祈りと熱意と努力で 125 年間続いて来たことはすばらしいことです。同窓生にとりましてもとても嬉しく、各地でお祝いの会が催されました。

10 月 8 日には同窓会主催で広島の地、大学のゲーンズチャペルにおいて開催され、同窓生の歌「どんなに時が流れても」を作詞された井野口慧子さん(高 14 回)のお話、クワイヤアイリスの合唱、盛田 恵さん(高 29 回)によるバイオリンの演奏、そして同窓会が寄贈したパイプオルガンの音色がゲーンズチャペルに響きわたりました。

10 月 29 日には東京にて関東ブロック主催で開催され、80 歳過ぎの方から 33 歳の方まで 140 名近くが集いました。黒瀬理事長・院長の食前の祈り、西恵三 元院長の乾杯のご発声で会が始まり、広瀬ハマ子先生以来二人目の同窓生の学長 長尾ひろみ先生から、2012 年 4 月には大学が新しく生まれ変わりはっきりとした職業目標を持ち資格取得に力を入れ

る《人間生活学部》と、広い知識と国際感覚を身につける《国際教養学部》へ再編成されることやいろいろな新しい取り組みについてのお話、星野晴夫先生の中学・高校のお話や、

片山美代子先生の元気の良いお話、岡崎美智子さん(高 22 回)のすばらしい歌を聴かせて頂いたりしながら、おいしいお食事を頂きました。和気藹々としたとても和やかな会で、広島女学院に連なる者の絆の強さを思い、また同窓生として母校に対する思いを改めて深く感じました。

キリスト教主義に基づいた人間づくりの教育に育まれた私達。125 年間受け継がれた伝統に思いを馳せ、「我らは神と共に働く者なり」という女学院精神を今一度胸に刻み、女学院で学んだことに誇りを持ち、この熱い思いを次の世代に伝えて行きたいと思えます。

これからも心を合わせて広島女学院と共に歩んで参りましょう。皆様方のご健康とご活躍をお祈りいたします。



広島女学院創立 125 周年を祝う会

10月29日(土)、品川プリンスホテル メインタワー17階“オパール”にて同窓会関東ブロック主催で母校の創立125周年を祝う会を開催しました。関東ブロック4支部の支部長、副支部長が実行委員として企画を始めて以来、大震災や原発事故が続いて、不安を抱きながらの準備でしたが、当日は広島から黒瀬理事長・院長、長尾学長、星野校長、古屋同窓会会長、中・高の片山美代子先生、それに西元院長もご出席下さり、総勢140名で賑やかに母校の発展を祝うことができました。



会は正午に司会の瀧口京子さん(白井/高23・文英5)の開会宣言によって始まり、藤井幸子さん(財満/高14)のお祈り、黒田尚子さん(丸本/高31)の奏楽による讃美歌90番と294番で開会礼拝を行いました。



来賓のご紹介の後には同窓会会長の古屋由利子さん(西川/大英14)にご挨拶をいただきました。会長は125年の歴史に思いを馳せつつ語って下さり、同窓会も加わった広島女学院からの震災義援金は福島市の桜の聖母学園の里親制度に使われることになったとの報告もありました。

黒瀬先生の厳かな食前の祈りと、西先生のいつもの楽しいお話と乾杯のご発声により会食が始まり、人数分に小分けして盛られた大皿が次々とテーブルに運ばれる中で、和やかな歓談の時となりました。



お食事が一段落した頃から先生方のご挨拶をいただきました。まず、長尾学長は、要請を受けて母校に帰って来られたものの、「私が出た学校では無い」と感じて着手された改革についてのお話でした。その改革とは、まず、学生も職員も全員が胸に校章を付けることにしたこと、既存の学部を発展的解消して改組すること、アメリカから若い優秀な人材を得て本当の英語を学べるようにすること、同窓生も利用できる20名宿泊可能なホテル(アイリスハウス)を作ること、障害を持った学生を受け入れること、放射能に怯える東北の学生を2年間限定で学費免除で受け入れることなど。



「絶対に元の女学院に戻します。」と熱く語って下さいました。

改組の詳細については大学のホームページをご覧ください。

続いて星野校長は、女学院とは縁が深く、奥様も同窓生（高23回）であること、また、広島女学院の歴史を読み返すうちにゲーンズ先生の残された言葉についての記述が少ないことに気付いて調べたところ、児玉弥三郎という方の書かれたものの中に、「ゲーンズ先生は日本語も讚美歌もお上手で



はなかったが、不言実行の方で、人の目に触れぬご自分の部屋の中で真摯に祈られる方であった」旨のことが書かれていたと教えて頂きました。

中・高の世界史の片山美代子先生は、旅に出るといろいろなことに気付き、感性が目覚めるので、いつもの定位置を少し離れて小さな感動を積み重ねることを勧められました。また、現在の才能は氷山の一角で、本当の才能は水面下にあり、やる気次第で才能は更に発揮できる、また、人生には限りがあるので、一刻、一刻を輝かせてほしいと語られました。先生は、小説を書くために停年の2年前に退職されたとのことで、葉山弥世のペンネームによる著書を多数寄贈して下さいました。



ここで嬉しいサプライズ！ミラノを拠点にオペラ歌手として活躍され、現在は愛知県立芸術大学で講師をなさっている岡崎智恵子さん（高22）が「伴奏無しで歌うのは生まれて初めて」とおっしゃりながら、プッチーニ作曲のオペラ「ジャンニ・スキッキ」より「私のお父さん」を歌って下さいました。

ここで嬉しいサプライズ！ミラノを拠点にオペラ歌手として活躍され、現在は愛知県立芸術大学で講師をなさっている岡崎智恵子さん（高22）が「伴奏無しで歌うのは生まれて初めて」とおっしゃりながら、プッチーニ作曲のオペラ「ジャンニ・スキッキ」より「私のお父さん」を歌って下さいました。

続いて、片柳 寛 元院長から届いたメッセージ。高林真澄さん（大下／高25・文英7）が口述筆記してくださったもので、「女学院の教師でいてよかった…。ありがとう。ありがとう。」という言葉は心に温かく響きました。

その後、広島女学院同窓生の歌「どんなに時が流れても」のメロディーを黒田さんにピアノで弾いて頂いたあと、全員で合唱しました。関東ではあまり知られていないため、メロディーのみの楽譜を準備したものの、歌っていただけるかどうか心配していましたが、まるで練習をしたかのようなしっかりとした歌声が会場に響き、「さすがは女学院生！」と嬉しくなりました。



懐かしい校歌斉唱の後、実行委員を代表して、関東ブロック長坂下 恵（杉田／文英1）が皆様への感謝を述べ、同窓会活動への積極的な参加と支部会費の納入をお願いして、閉会のご挨拶といたしました。

午後2時半、瀧口さんによる閉会宣言の後、メインタワー39階の“トップオブシナガワ”に準備した二次会で、約70名の方々に、先生方を囲んで語らいの時を楽しんでいただきました。



なお、黒瀬先生から冊子「125年と人に学ぶ」を、黒瀬禎子様からも「広島女学院の人（一）」を、出席者全員にご寄贈いただきました。

（坂下 恵 記）

A : 古屋会長、高 13,14、大英 13,14



F : 高 18,20,23、大英 18,短大 17,文英 2,文日 5



B : 黒瀬先生、高女 47、専庭 7、専英 26、高 7



G : 高 19、文英 1、文日 1



C : 西先生、高 5、大英 5、短大 4



H : 高 19、文英 1、文日 1、短大 16



D : 高女 52、高 3,8,9,12、大英 3、短大 5,7,8,12



I : 高 22、文英 4、文日 4、短大 20



E : 高 10,15,16,17,21,大英 10,15,16,17,短大 14,15



J : 高 23,24、文英 5,6、文日 6



K : 星野先生、高 29,31,33,36,42、文英 15



L : 高 26,27、文日 8、文英 9



M : 高 25、文英 7、文日 7、短大 24



N : 片山先生、高 46,47,49



O : 高 28,29、文英 11、短大 28



片柳寛先生からのメッセージ

「広島に 女学院あり あやめ咲く」

常にこの自作の句を口ずさみながら過ごしております。

「女学院の伝統は、学生たちの中に流れている。」そう思ったのは、女学院を退職して他の大学で教鞭を執った時でした。「女学院の学生たちは深い愛の中にいるのだ」という確信があります。私はその学生たちの添乗員でしかありませんでした。現世では杖に頼る生活ですが、あの世では「女学院の教師だった」と胸を張り、大手を振って歩きたいと思っています。女学院の教師でいてよかった…。ありがとうございます。ありがとうございます。



(2011年10月4日 口述筆記)

元院長・学長の片柳寛先生は、9月27日に満87歳になられました。

数年前に腰を悪くされて以来、医師の往診とヘルパーの食事介助を受けながらベッドの上でお過ごしです。お伺いするといつも「ありがとうございます」と手を合わせてくださいます。



高林真澄(大下/高25・文英7)

東京支部役員



神奈川支部役員



千葉支部役員



埼玉支部役員



ハートマン先生の思い出

佐々木タカコ（高5）

今年7月中旬に1年後輩の久保明美(旧姓後藤)さんから一通の葉書を頂いた。ドーリス・ハートマン先生が亡くなられたと。

1950年頃は、“J・3”という3年契約で日本に来られたミッシヨナリーの先生方がたくさんいらした時代だったが、ハートマン先生も“J・3”として1952年に来日され、1966年まで宣教師、英語と聖書の教師として女学院高校に勤務された。

私と先生との永いおつき合いは、私の保育短大への進学でお世話くださったミス・アンダーソンが帰国療養される事になり、私へのサポートをハートマン先生に頼まれたことに始まる。夏休みに神戸のパルモア学院の寮に泊まられて、ソフィア・ローレン主演の映画“Boy on a dolphin”に誘って下さったことがあった。遠慮もあって「行かない。」と言うと「何故？」と聞かれ、「あの女優さんはすごくグラマーだし・・・。」と言うと、「グラマーが嫌い？」と大笑いされた。結局、連れて行って頂き、水と戯れるイルカと少年が美しくとても面白かった。

卒業後、保育の仕事に就いた私が季節の挨拶や仕事の様子を手紙に書くと、先生は必ずきちんとしたお返事や美しいクリスマスカードをくださった。

1966年、53歳で先生は女学院を辞められ、安佐南区古市に伝道所を開かれて、牧師として開拓伝道に力を注がれた。友人の話によると説教は全て日本語だったそうである。その先生も来日当初は職員会議で何が話されているのかほとんど分からず、唯一楽しみは、その時出される日本茶と羊羹だったそうだ。

1981年に停年を迎え、帰国されてからも折にふれて来日され、青山学院のゲストハウスや空港でお会いしたものだ。ノッポの先生とチビの私、日本語で話す私の言葉を受けて英語で返す先生の二人連れはおかしかったらしく、振り返って見られた。

1991年の夏、保育施設で働いていたときに関わった児が養子縁組でカナダに行った。その児の様子見を兼ねて旅行した時に足を延ばして先生を訪ねた。

マサチューセッツ・アマーストのお宅はボストンからバスで1時間のウェブスターコート大学の街近くにあった。二軒続きのコンドミニウムで一晩泊めて頂いたが



流川、女学院宣教師館前 ハートマン先生 84歳
1965年クリスマス、52歳

日本の思い出の品がそこここに飾られていた。でも、後少しでそこを売ると言われ、入居予定のケアハウスと一緒に見に行った。先生、78歳だった。

先生はいつも理知的で合理的でさっぱりしていらした。新しい事にチャレンジされ、ケアハウスに移られてからもアジア研究会、マラソン、退任牧師会、旅行、日本紹介の講演など、ずっと活躍され、高齢になられてからもパソコンを使いこなし、インターネットであちこちに発信されていたようだった。「パソコンは面白いし、インターネットは安価で便利だから貴女もやってみなさい。」といつも言われたのに、どうとう私はやらずじまいになってしまった。

90歳を過ぎて歩行がきつくなられても、車椅子に乗せた車を運転してリハビリの水泳や体カトレーニングに出かけるという手紙を頂いた。一級下の元岡(旧姓湯浅)さんや一級上の西尾(旧姓赤川)さんと、「先生の様子に年を重ねてゆきたい。」と話し合い、目標にしていたのだった。

今年3月の東日本大震災の後の17日には、広島の久保さんの所へ震災後の日本を心配されて電話をなされ、久保さんが必死で英語で喋ろうとしたところ、「日本語でどうぞ！」とおっしゃったそうである。

2011年7月4日の朝、先生は98歳だった。

(10月9日に古市教会で追悼記念礼拝が行われると聞き、とんぼ返りだったが参列することができた。)



ハートマン先生 84歳(中央)、佐々木さん(右端)

「修道の講堂」

白井京子（現・瀧口）高23、文英5

■私の名刺の住所は、自宅ではなく圭三プロにしてあるので、事務所にはいろいろな郵便物が届く。数年前の今頃、「大きな荷物が届いたので開けてみたら、お菓子のおうちでしたよ」と、事務所から電話。事務所に届くものは、基本的には開封することになっている。取りに行ったら、80センチ角位の大きな立方体の箱の中に、ビスケットやクッキー、チョコレートなどでできたクリスマスシーズンのかわいいおうちが入っていて、全部食べられるという。添えてあった手紙には「今年、披露宴の司会をしてもらって、とてもいい結婚式になったのでそのお礼に送ります。どうぞ、ご家族でお召し上がりください。」とあった。ありがたく、何ヶ月にもわたって楽しませてもらった。

今年の夏には、厚い封書が届いた。「元、修道高校演劇部のSです。覚えていますか？一緒に阿部公房の「壁ーS・カルマ氏の犯罪」に出ました。先日、修道の同期会で白井さんの名前が出て、東京でご活躍と知り、懐かしく、手紙を出しました。何人かで広島カープの応援に行きませんか？」といううれしい内容だった。そして、カープ応援は日にちが合わなかったが、当時の部長のHさんと三人で魚料理を食べに行くことになった。顔を見たらすぐ思い出した。「白井さんと僕は、恋人同士の役だったんですよ。」と言われ、「ええっ！そうだった？」と、まじまじと顔を見て記憶のねじを巻き戻す。



当時の両親（広島城にて）

当時、私は女学院高校の演劇部に入っていたが、修道の演劇部に知り合いがいて、今回の芝居にはどうしても女性が一人必要だからと私に出演依頼があった。修道の講堂に先生以外で、しかも女優として出演する人は初めてだといわれた。その後は？と聞く、その後も例が無いらしい。

ここで、私の両親のことを話したい。旧制広島から広島大に進んだ父は、前からやっていた演劇部に所属し、学生生活を謳歌していた。しかし、こちらも男ばかりで、女性が出てくる芝居がなかなかやりづらい。そこで、ロシアのゴリーキーの「どん底」

をやるという時、女性をどこから借りてこようということになり、当時の広島女専の演劇部にいた母が出ることになった。そして二人は出会い、結婚した。我が家の愛唱歌の一つは、「どん底」の牢屋のシーンで囚人たちが歌う歌で、♪明けても暮れても牢屋は暗い♪というくらい歌を明るく歌うのだった。それに、我が家の歴代の猫の名前はほとんどがロシア名のアーニヤ、ルカなどだった。私は両親のようにロマンスが芽生えることも無く終わったが、こうして、時々懐かしく声をかけていただいたり、修道の講堂に役者として出演した最初で最後の女学院生という名誉もいただいた。

■私と娘は、少しダイエットをしようということで、朝食にキャベツを食べるというのをやっていたが、すぐに飽きた。そして次はシリアルダイエットを始めた。たまたま週刊誌にシリアルベスト10が載っていたので、それを熟読し、1位のカルビーの「フルグラ」を買ってみた。そのあまりのおいしさに、毎朝、起きた途端に朝食が楽しみなのだ。娘が探したフルグラに関するブログの中には、「朝食でフルグラを食べ終わったら、もう昼食のフルグラが楽しみで、よだれが出そう！」などというものまである。今までシリアルというともそもそもして味気ない、チョコなどの子供の味付けしかないというイメージだったが、フルグラはこれまでのイメージを覆すおいしさだ。しかも、元々、広島のカルビーだし。また、基本のフルグラに時々期間限定でメープルシロップ味や夏のココナッツ味など、これまたおいしい新しい味が出るのも楽しみで、このごろはいつもシリアル売り場を覗くようになった。牛乳はかけてもかけなくてもおいしく、これから寒くなったら、牛乳を少し暖めてみようかなとか、豆乳もいかなと考える日々である。

猫坂をゆると吹き上ぐ御祭風 白井薔薇

秋場所やこんなお方が大声で "

木目込の首の傾げや秋灯 "

竹春のインクの壺を透かし見て "

夫逝きて夢にも現れず水緒の月 "

俳号 白井薔薇 しらいそうび … 俳句結社「童子」同人、日本伝統俳句協会会員

テレビ東京「サブちゃん」と歌仲間」に出演中



クリスマス会のお知らせ

東京支部 12月3日(土) 1時～3時 銀座教会5階 "ぶどう"
開会礼拝、懇親会、讃美歌を歌いましょう！ 他支部の方もどうぞ！
お問い合わせ：TEL/FAX 03-5386-0740 坂下

千葉支部 12月5日(月) 10時半～2時半 新津田沼教会
礼拝、会食、懇親会
お問い合わせ：TEL/FAX 043-266-3342 村中

神奈川支部 12月13日(火) 12時半～3時
ダイニング ライブハウス「ヤンキイス」(関内駅そば) 会費 ¥4,000
お問い合わせ：TEL/FAX 045-821-4342 梶川



2011 夏雲の集い 報告

～ 原爆死没者追悼礼拝 ～

関東ブロックでは原爆による母校の350名の犠牲を追悼し平和に向き合う集会として、故 秦知子先生の提唱による「夏雲の集い」を1988年から毎年開催しています。24回目となる今年は、埼玉支部の担当により、7月4日(月)に北区の日本基督教団 王子教会にて行いました。

礼拝は、福岡清子さんの司式、今井典子さんの奏楽で始まり、王子教会の大久保正禎牧師からマルコによる福音書14章3～9節に基づいて「彼女を記念して」という題で説教をいただきました。

第二部では、高田三郎作曲の「アッシジの聖フランシスコによる 平和の祈り」を事前の呼びかけに応じて集まった16名で二部合唱いたしました。

梅宮玲子さん(天野・高24)によるジョルジュ・ムスタキ作曲のシャンソン「HIROSHIMA」と佐々木禎子さんを歌った「祈り」の独唱は、深みのある声に込められた思いが心に響きました。

御多忙のなかご出席頂いた黒瀬先生から女学院の展望についてお話いただき、西 恵三先生からは、「金環日食が2012年5月21日に、皆既日食は2035年9月2日に見られる」という、いつもながら遠い未来に思いを馳せるお話をいただきました。

蒸し暑い日でしたが、同窓生以外の方も含めて60人の参加があり、心に残る集いとなりました。(坂下)

